©Naoyoshi Sueishi

RUGBY WORLD CUP JAPAN 日本2019

ジャパンの道のり

文／生島 淳

日本がロンドンでイングランドと対戦した2018年11月17日の晩。アイルランドはダブリンでオールブラックスに感動的な勝利を収めていた。その試合を観て「一年後、アイルランド戦の勝算は極めて薄い」と思われたが、イングランドに善戦した選手たちには、違う景色が見え始めていた。

サンウルブズ　2016年2月　東京　©Shinji Akagi

ジェイミー・ジョセフヘッドコーチ　©Shinji Akagi

二人の指揮官

2015年のワールドカップが終わり、世界のラグビー界はすぐに4年後の、19年W杯に向けて動き出していた。

W杯で南アフリカ撃破を含む3勝1敗という結果を残した日本。ヘッドコーチだった「エディーさん」は日本を去ることになっていた。離日を数日後に控えた11月のある日、私は秩父宮ラグビー場に近いエディーさんのオフィスに最後のインタビューに向かった。

エディーさんはすでにスーパーラグビーの南アフリカにあるストーマーズの指揮官に就任することが決まっており、その準備に追われていた（その後、12月に入って急転直下、イングランド代表のヘッドコーチへと転身する。そのオフィスには『ジャパン』の残り香があり、ホワイトボードには代表選考に絡む選手たちの名前がまだ残っていた。私は好奇心から、エディーさんに19年W杯で主力になる選手を聞いてみた。

「FWの第一列。稲垣は年齢的に成熟期に入るでしょう。彼は結果を残すと、調子に乗るところがありますが（笑）、年齢を重ねればいいリーダーになれるでしょう。フッカーの堀江は年齢的なことが不安要素のひとつですが、彼は必要不可欠な人材です。3番は畠山がピークを過ぎてしまうので、若手の発掘が必要です」

周囲はロックだった。

「真壁はまだまだプレー出来ますが、キンちゃん（大野均）、トンプソン。もう彼らはおじいちゃんだから（笑）、次のW杯ではロックを育成する必要があります。日本の最大の弱点はロックです。永遠の課題かもしれません」

さすがのエディーさんも、4年後にトンプソンが主力として活躍しているとは想像できなかったようだ。当然だ。トンプソン自身も想像していなかったのだから。

それに比べて第三列の陣容は豊富である。

「2019年、リーチは世界でも有数のプレーヤーになっていることでしょう。チームのハートね。南アフリカ戦の逆転に欠かせなかったマフィも最高の状態を迎えているでしょうね。いまの日本の第三列は競争が激しい。ただし、日本人選手が割って入ってきて欲しいですね。かつての伊藤剛臣、大久保直弥が活躍した時代の日本人第三列は世界に十分通用していましたから」

当時、姫野和樹はまだ帝京大の3年生にしか過ぎなかった。

そしてハーフ団とセンターは、日本の生命線となる重要なポジションだ。エディーさんの見立ては次のようなものだった。

「9番は田中ラミが80分を通して出場するのは難しくなるかもしれませんが、彼のパス捌きが必要になる時が必ずくるはずです。しかし他にも日和佐篤、それに大学生にもいい人材がいます。ディビジョン・メーカー（意思決定者）である10番、12番に関してはハル（立川理道）がピークを迎えるはずです」

エディーさんからは田村優の名前は出なかった。

「田村はいまのところ、波が大きすぎるんです。安定したプレーヤーであることを彼は証明しなければなりません」

4年後、田村はジャパンにとって欠かせない選手となっていた。ウィング、フルバックのバックスリーに関しては大きな期待が寄せられていた。

「五郎丸は今回のW杯がピークだったでしょうね。素晴らしいパフォーマンスを披露してくれました。五郎丸がいなくなったとしても、松島がいます。松島は11番から15番までどのポジションでもこなせますが、2019年にはさらに良くなっているでしょう。彼は海外でプレーするチャンスがあるはずです。それと福岡堅樹は、これからどんどん成長していくでしょうね」

予言を残し、エディーさんはイングランドのヘッドコーチに就任すると、16年のシックスネーションズですぐに優勝してしまう。イングランド代表に外国人ヘッドコーチが就任したのは初めてのことだったが、いきなりエディーさんは結果を残した。

そして16年は、日本にも大きな変化があった。もともとはエディーさんが発案したスーパーラグビーへの参加が実現する。「サンウルブズ」というニックネームがついたチームは、南半球の強豪チームと対戦し、選手の経験値アップに大きく貢献するはずだった。16年6月のテストマッチは、このサンウルブズを母体としたチームで戦い、日本代表の本格的な船出は11月のヨーロッパ遠征からとなった。

エディーさんの後釜には、ジェイミー・ジョセフが就いた。

かつて、オールブラックスのナンバー8として95年のW杯でプレー。その後、日本のサニックスにやって来て99年の平尾誠二率いる日本代表でもプレーした。そして13年に指導者へと転身し、スーパーラグビーのハイランダーズに優勝をもたらしていた。

ジェイミー・ジャパン初のテストマッチは、11月5日に秩父宮で行われたアルゼンチン戦だった。準備不足が祟ったジャパンは20対54で大敗を喫するが、ヨーロッパに渡ってジョージアには28対22で敵地にて勝利を収めた。

そしてこの遠征のメインイベントは、19日にカーディフのミレニアム・スタジアムで行われたウェールズ戦である。

振り返ってみれば、この試合でジェイミー・ジャパンの「青写真」が見えていた気がする。基本はキックによって陣地を前へと進める。加えてディフェンスの早い仕掛けから相手へとプレッシャーをかける。

前半37分には、山田章仁がこぼれ球を拾って独走のトライ。13対14と僅差で前半を折り返す。そして後半14分には、連続攻撃から狭いスペースを攻略して福岡がトライ。後半34分には30対30の同点に追いついたが、39分に勝ち越しのペナルティゴールを許し、30対33と敗れた。

試合後、ジェイミーは敗戦をこう総括した。

「ウェールズ代表にプレッシャーをかけることができていたと思う。我々は他のチームと比べ、特殊なゲームプランを持っている。自陣を含めどこからでも仕掛けること。そうすると相手のディフェンスに混乱が生まれ、混乱の中でプレッシャーが生まれる。自分たちにもプレッシャーがかかる。負担の大きい展開だが、そこで必要なのはリーダーがチームを引っ張ることだ。そこは立川がしっかりやってくれたと思う」

ただし、この遠征にはリーチをはじめ、前年の主力メンバーがいなかった。

「昨年のW杯に出場した選手のうち多くの選手が今回出場しておらず、残念なところはあるが、それを払拭できるような新しいチームが作れたと思う。アルゼンチン代表戦では大敗してしまったが、そこから一週間で立て直してジョージア代表戦で勝利し、今日カーディフでこのようなパフォーマンスを見せることができたのは非常に嬉しく思う」

ウェールズ戦　2016年11月　カーディフ　©Shinji Akagi

ただし、この時期、まだ首脳陣と選手たちのコミュニケーションがうまく取れていたわけではない。翌週フランスで行われたフィジー戦では25対38と完敗を喫するが、この時もキック主体のゲームプランを継続したままだった。キックからのカウンターを得意とするフィジー相手にもキックを多用したのである。福岡はこのときのことをこう振り返る。

「まさか、フィジー相手に蹴っていくとは思いませんでした。なにか、前の年のW杯での戦い方を払拭しようとしているのかな、と思ったくらいで」

ジェイミーの見方はまったく違った。

「10月中旬までトップリーグの試合があり、選手たちはそこから合流してきました。ところが、われわれが求めるようなフィットネスレベルに達していない選手が多かった。日本のラグビーの課題は、国内の要求レベルが低いことなんです。もしも、フィジー相手にボールをキープする戦術を採ったとします。無理です。だからこそ、われわれの体力を温存するためにキックを主体とした戦術を選択したのです」

ジェイミー・ジャパンは始まったばかり。選手も指導者も手探りの状態が続いていた。

リーチの復帰

2017年になり、6月のテストマッチの季節には「キャプテン」が戻ってきた。リーチがその前年、ヨーロッパ遠征への帯同を拒否した。ジェイミーからすれば、裏切られた思いがしたかもしれない。しかし、リーチにとってはこの休息が必要だったという。

「気持ちを作り直す必要がありました」とリーチは振り返っている。

6月のテストマッチのメインターゲットは、W杯でも同じA組に入ったアイルランドとの2試合だった。

このテストシリーズで目立ったのはアイルランドの充実ぶりだった。静岡のエコパ・スタジアムで行われた初戦は22対50、東京の味の素スタジアムでの第2戦は13対35。強力なFWに支えられ、SOのジョナサン・セクストンが自由自在のゲームメイクを披露していた。ロックにケガが相次ぎ、急遽招集されたトンプソンルークはこう話した。

「アイルランドのFW、めっちゃ強い。互角に戦うの、大変ね」

この時点で、2年後のW杯でアイルランドに勝つというイメージはまったく出来なかった。戦術が、ちぐはぐだったからである。

戦術的には多様なキックを用いたが、せっかくターンオーバーでボールを奪っても、キックでわざわざボールの所有権を手離しているように見えた。ジャパンの伝統芸であるスピーディーなアタックが鳴りを潜めていることに、「大丈夫なのか……」と不安に思うメディア関係者も少なくはなかった。合流間もないリーチは、会見でこう話した。

「ジェイミーやブラウン（アタックコーチのトニー・ブラウン）のやろうとしていることは理解できているので、あとは精度を高めていくことだと思います」

続く11月のオータム・テストでは、オーストラリアに30対63と大敗。ただし、2週間後には低迷していたフランスと23対23で引き分けている。

それでも、この時期にはまだ首脳陣への信頼は醸成されていなかった。松島は当時のことを正直に話してくれたことがある。

「このままのラグビーをやっていて、大丈夫なんだろうか……。選手たちでそう話し合ったこともありました」

キックを主体とした戦術に浸透しきれず、まだ「ONE TEAM」と呼ぶには程遠い集団だった。変化が起きるのは18年の秋である。

アイルランド戦　2017年6月　静岡　©Shinji Akagi

松島幸太郎　W杯ロシア戦　2019年9月20日　東京　©Shinsuke Ida

イタリア戦　2018年6月　大分　©Shinji Akagi

転機

2018年はサマー・テストでイタリアと1勝1敗。ジェイミーは「2戦続けていいパフォーマンスが出来ない」と課題を挙げ、その克服に着手することになった。

W杯の開幕まであと1年となったこの年の9月、和歌山で合宿を張ったジャパンはボールを使わない走り込むトレーニングと、「ダイバーシティの持つ意味」について考える機会を持った。

ジェイミーは、多国籍からなるこのチームでプレーする意味、そして日本人と海外出身の選手たちの違いについて説いた。

「日本人は勤勉だが、対応力に欠ける。それは海外出身の選手たちが得意とするところだが、外国生まれの人間は協調性に欠ける部分がある。そうした違いを踏まえた上で、一緒にチームを作っていこう」

地元開催のW杯、そろそろチームをまとめなければならない時期に来ていた。リーチも積極的に発言するようになった。そしてこの年のオータム・テストで日本は手応えを得る。

11月3日に行われたオールブラックスとの対戦では大敗を喫したが、2週間後の17日にはトウイッケナムでエディーさん率いるイングランド代表と対戦し、前半を15対13とリードしたのだ。後半は零封され、最終的には15対35で敗れたものの、この試合で選手たちは自信を深めた。リーチはいう。

「トウイッケナムで、イングランド相手に前半のような素晴らしいゲームが出来た。接点では負けていなかったし、セットプレーからの仕掛けも効果的で、これで絶対にW杯でアイルランドとスコットランドには勝てると思いました」

日本がイングランドと対戦した夜、アイルランドはダブリンでオールブラックス相手に感動的な勝利を収めていた。

「来年、このチームと対戦しなければならないのか」。私はロンドンのパブでこの試合を見ながら、来年のW杯でアイルランドに勝つのは至難の業に思えた。

しかし、選手たちには違う風景が見えていた。最後の仕上げは、19年に入っての地獄のような合宿だった。

W杯へ

エディー・ジャパンに比べ、ジェイミー・ジャパンはメディアがアクセスする機会が少なかった。W杯イヤーに入り、2月からスタートした合宿でも、チームの全容をうかがうことは難しかった。

選手たちは厳しい合宿をこなしていたが、7月にパシフィックネーションズ・カップでフィジー、トンガ、そしてアメリカに勝ったものの、全容が明らかになったのは9月5日、熊谷で行われた南アフリカとのテストマッチである。この試合、日本は南アフリカFWの圧力に屈し、なおかつマフィ、福岡を負傷退場で欠くことになった。なぜ、開幕の2週間前に巨人、南アフリカと戦わなければならなかったのか。私を含めたメディアはそれを疑問に思っていた。しかし、ジェイミーは毅然としていた。

「合宿の内容はハードで、これだけのものを積み上げたのだから、パシフィックネーションズ・カップで勝つのは当然だと思っていました。そこで、W杯までにもう一度選手たちは謙虚になる必要があった。だから南アフリカとの対戦を組んだのです。あの試合を戦うことで選手たちは自分たちに足りないものが見えたはずです」

そしてジェイミーは私にこう話した。

「南アフリカと対戦するリスクは、対戦しないリスクよりもはるかに小さい」

つまり、本番前に本当に強いチームと戦うことが必要だったとジェイミーは信じていた。

そしてW杯の幕が開く。

初戦のロシア戦では緊張から内容が思わしくなかったが、第2戦のアイルランド戦で日本は合宿の成果を見せる。

2年前、同じエコパ・スタジアムで大敗した相手に一歩も引かなかった。

前半13分と20分にはキックを絡めた攻撃でトライを献上したが、ディフェンスではFWが攻撃的なタックルを浴びせ、ゲインを許さない。日本がトライを奪ったのは後半12分の福岡のトライだけだったが、PGを着実に加えた日本は19対12とリードしたまま、終盤のアイルランドの猛攻を耐えた。

そしてこの試合で印象的だったのは、日本が中心としてきたキック戦術ではなく、4年前のエディー・ジャパンのようにボールの所有権を重視し、パスでつないでいくアタックを披露したことである。

「まさか」と思ったが、日本はキックとパス、いずれの戦術でも列強と戦える力を身につけていたのである。ジェイミーはチーム作りの要諦をこう語る。

「チーム作りの土台となる〝ファウンデーション〟が全体の70パーセントを占めます。残りの30パーセントがゲームウィークに入ってから。そこで仕上げればいいだけです」

合宿で築かれた強固な土台が日本を支えたのである。

翌週のサモア戦でも4トライを奪ってボーナスポイントを獲得すると、悲願のベスト8進出はプール最終戦のスコットランド戦に懸かることになった。

しかし、このゲームウィークには台風19号が来襲し、3試合が中止になった。日本対スコットランド戦も開催が危ぶまれたが、関係者の尽力によって試合は予定通り行われた。

スクラムを押し勝った具選手とジャパンFW
W杯アイルランド戦　2019年9月28日　静岡
©Hiroyuki Yakushi

イングランド戦　2018年11月　ロンドン　©Shinji Akagi

©Takashi Ito

©Shinji Akagi

©Shinji Akagi

©Hiroyuki Yakushi

堀江翔太から始まったのオフロードパス。ジェームス・ムーア、ウィリアム・トゥポウと繋ぎ、福田啓太の代表初トライを導く。W杯スコットランド戦　2019年10月13日　横浜

そしてこの試合、ジャパンのアタックが結実する。奪った4トライは、いずれも練習の成果が出たものだった。

1本目、福岡からのオフロードパスを受けた松島がトライ。

オフロードはジェイミーが就任した時から強調してきたスキルで、福岡は「去年の秋くらいから、重点的に取り組んだのが結果につながりました」と笑顔で振り返った。

2つ目のトライは、オフロード祭り。堀江がクルッとターンして相手を外すと、ジェームス・ムーア、ウィリアム・トゥポウが続き、そして最後は稲垣がトゥポウからのパスを丁寧に受け取ってゴールドにトライ。

これまで外側でトライを重ねることが多かったジャパンだったが、このときばかりはど真ん中をぶち抜いてトライを奪った。

3つ目は前半終了間際、ドロップアウトから再開されたボールを確保すると、瞬く間に数的優位を確立し、ラファエレティモシーがキックを転がすと、福岡がトップスピードでこれをキャッチして、そのままトライ。

そして4つ目は、ディフェンス全体でスコットランドへプレッシャーをかけると、外側から詰めた福岡が相手のボールをかき出してつかみ、40mほどを走り切った。

最後はスコットランドの猛攻をしのいで、初めての準々決勝進出。日本のラグビーの歴史が変わった瞬間だった。

だが、翌週は南アフリカに敗れた。

前回のW杯以降、なにかと日本との因縁が取りざたされる国だが、彼らのフィジカルパワーに日本は圧倒された。

抵抗の末の敗退。日本が列強と伍する力を示したW杯だった。

この4年間、ジャパンを見続けてきてもっとも印象に残っていることは、「歓声」である。

特にアイルランド戦が行われたエコパ・スタジアム、アイルランドからやってきた大応援団が歌をうたいだすと、それにかぶせるようにして日本のファンが「ニッポン！　ニッポン！」と声を振り絞る。

プレーと観客がシンクロし、信じられないような空間が生まれていた。

私は歓声を聞きながら、「ここはまるで、ヨーロッパのスタジアムみたいだ」と感慨に浸っていた。誰からも応援を強制されることなく、自然発生的に起きた歓声。それは日本の「宝」と言ってよかった。

その歓声をもたらしたのは、間違いなく選手たちである。

2年前はジェイミーが唱える戦術に疑問を感じていた選手たちが、100パーセント方向性を信じるようになり、それは世界に誇れるクリエイティブなラグビーへと昇華した。

フィジカルとディフェンスが席巻したW杯で、日本は独自のラグビーを世界へプレゼンテーションすることに成功したのである。

だからこそ、ファンは呼応し、素晴らしい空間が日本で生まれた。

W杯のレガシーがあるとするなら、私はあの日のエコパ・スタジアムの歓声を選ぶ。

日本のラグビーに携わっていた人間が作りだした奇跡の空間がそこにあった。

その記憶こそ、最高のレガシーだと私は思う。

W杯 アイルランド戦 2019年 9月28日　©Shinji Akagi